

核のゴミの最終処分場が決まらないのは危険だからですか？

学習内容の定点

アイデア駅 志の人

- 一、町の全貌を見渡す俯瞰的視点
- 二、世界観の醸成
- 三、国際的視点から偏向報道を批判



アイデア的側面:

- (1) 最終処分場が決定すると産業、研究開発、エネルギー安全保障のすべての面で促進効果をもたらし、原子力エネルギーの評価が高くなり、他のエネルギー源より優位であることが俯瞰されます。
- (2) 個人的視点だけでなく国際的視点、社会・国家的視点（エネルギー安全保障、国家安全保障、エネルギー市場の動向、地球温暖化防止）を持ち、最終処分場の問題の大切さを理解していただきたいものです。

情緒駅 [科学+常識+情緒]の人

- 一、恐怖・呪縛という心理を分析する（アンカー効果、後光効果）
- 二、“空気”と“呪縛”に“水”を差す方法
- 三、“情緒の自由”と“共同体のルール”のバランス。多数決の原理を採用。



情緒的側面:

- 情緒(1): 「トイレなきマンション」という情緒的な言葉が足かせになって、地層処分の正しい理解が妨げられています。
- 情緒(2): 「火山帯」、「地震列島」などの言葉が、高レベル廃棄物の「放射能の強さ」と相乗作用して、最終処分場の適地がないとか、などの空気を作り出しています。
- 情緒(3): 万一固化体が破損して地下水と共に地上に漏れる場合、万年の年月を要します。しかも漏洩場所の広がりには限定されます。

常識駅 [科学+常識]の人

- 一、“量”を問題にする
- 二、「日常生活に支障があるか、ないか」を判断基準にする
- 三、PDCAを回す組織は信頼性が高い



常識的側面:

- 常識(1): 地層処分には、廃棄物とガラスを混合したガラス固化体を使う。ガラスは安定した物質で、10万年間性質は変わりません。この固化体を保護するため、厚み20cmの鋼製容器に入れ、さらに水を通さない粘土で包む。地下300メートルより深い場所に埋設します。
- 常識(2): 日本列島は、火山帯と地震多発地帯があるが、地下数百mでは岩盤があり10万年程度は安定している。
- 常識(3): ガラス固化体の放射能は、最初の数百年で大きく減衰し、数万年経てばウラン鉱石の放射能のレベルとほぼ同じになります。
- 常識(4): 地層処分場の面積は、直接処分で600万平方メートル（羽田空港埋め立て地分6つ分）、核燃料サイクルで放射性物質を減らした場合に100万平方メートル（同1つ分）程度です。

科学駅 科学の人

- 一、誤解の科学的側面を明確にする
- 二、市民の非科学的振る舞いの例示
- 三、科学は“判断”に関係なく、常識は“量”を問題にする、という認識



科学的側面:

- 特徴(1): 原子力発電所（120万キロワット）の稼働で年当たり24トンの使用済み核燃料が発生する。発電によりこれまで13,000トンの使用済み燃料が蓄積しています。
- 特徴(2): 我が国の使用済み核燃料の最終処分方法は、他の国々と同様、地下300mの地層処分を採用している。場所は日本ではまだ決まっていません。このため原子力施設を「トイレなきマンション」と呼ぶことがあります。
- 特徴(3): 地層処分では、使用済み燃料の高レベル廃棄物をガラスと混ぜてガラス固化体にして埋蔵。
- 特徴(4): 日本列島は、火山帯が多くあり、地震多発地帯です。このような列島内に最終処分地を決めるには、慎重な適地選択と国民・地域住民の理解が欠かせません。

誤解駅 誤解の人

- 目星をつける:
 - 一、誤解の特徴を明確にする
 - 二、誤解を科学的、常識的、情緒的側面に分解する